

会報

第23号

編集・発行人 支部長 浅子逸男

30-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学日高佳紀研究室内

当機はただいま順調に…

飛行機に乗っていたある時、それまで通り隣席の同行者に話しかけていると、突然真面目な顔で「着陸なんだから静かにして！」とたしなめられた。何のことかと思つたが、たしかに周りを見渡すと、着陸時の機内は各国人、老若男女関係なく皆がじっと押し黙っている。あたかも機長の緊張感を全員で共有しているかのようにあつた。そういえば飛行機の操縦は、飛行時↓離陸時↓着陸時の順で難度が上がるらしい。それに支部運営を当てはめるならば、私が運営委員長を務めたこの二年間は、操縦能力とは無縁の飛行中であつた。本誌二〇号の巻頭言に書いたように、現在の運営体制は、前体制が大きく作り替えた延長にある。その離陸時の大いなる努力を継いで、ほとんど自動操縦で二年間を終えられたことは、個人的には幸いであつた。ただ、飛行機はやがて着陸せねばなら

らない。実はこの二年間で、就職や役職の変更、介護や育児などで、多くの運営委員が人生の転機を迎えた。その事情を抱えつつも、各委員は誠実に運営業務に尽力している。ただその姿を見るにつけ、運営委員会が学会運営以外に、連続企画の立案や出版といった研究的方向性まで先導するのは、やや困難な時期に差し掛かってきたのではないかと感じた。また同時に連続企画に対しては、会員中に賛否があることも仄聞している。(会員提言の企画などが実現できれば、こうした点が少しは改善できるかもしれない。)

新しい運営体制がいかに変わろうとも、それは迷走ではなく、支部と会員のための判断だと信じている。

一会員に戻った今でも、フライトの楽しみと着陸の緊張感を、現運営委員会と共有したいと思つている。

木田 隆文

支部大会案内

二〇一六年度

春季大会

於・花園大学

六月四日(土) 午後一時より

〔プログラム〕

開会の辞

花園大学文学部長

松田 隆行

織田作之助と川島雄三

酒井 隆史

講演

『京都』について

黒川 創

連続企画「『異』なる関西—1920

・30年代を中心として—」

第二回「根(ルーツ)を問う」

質疑応答

閉会の辞

支部長 浅子 逸男

総会

発表

金達寿における関西

—〈神功皇后の三韓征伐〉

と「行基の時代」

廣瀬 陽一

〔趣旨文〕

連続企画第二回では、人々の出自や故郷を持つ記憶Ⅱ「根」と、関西との関係を、文学から問いたい。

関西の特定の地域で生まれた、とい

う出自の問題は、時に人々を差別や暴力にさらし、人々に「根」との対峙を強いてきた。企画の一つの軸は、抗いがたい運命のようにつきまとう、この「根」の問題と葛藤する方法を、文学、あるいは文字表現はいかに用意したのか、あるいはその葛藤をどのように表現してきたのかを考えることにある。

また、関西には、生まれた場所から離れ流入してきた人々が集い、自分たちの生きる場所を作り上げた、そのよくな空間が散在している。自らを「異」なる者として規定する視線にさらされながら、そこにいる人々は、文学によって、どのように自分たちの場所を確保したのか。この問いが、もう一つの軸となつている。それは言い換えれば、「根」から切り離された空間において共同性を確保する、という営為と、文学がいかに関与したのかを問うことで

もある。

以上の問題を、「《異》なる関西」という標題で括る暴力性そのものを再検証しようのような議論の場としつつ、場所と人々とに積層する記憶を掘り起こし、そこで生じた文学と、人々の生のあり方を凝視すること。このような狙いから、連続企画第二回を開催したい。

【発表要旨】

金達寿における関西

—〈神功皇后の三韓征伐〉

と「行基の時代」

廣瀬 陽一

在日朝鮮人作家でのち古代史研究家となった金達寿（一九二〇～一九七）は、一九三〇年に渡日して以後、神奈川県や東京都内で暮らし、関西に生活の根を下ろすことはなかった。だが彼の知

的活動に目を転じると、関西ほど関係の深い地域はない。彼と関西との出会いは小学五年生の時に授業で教えられた〈神功皇后の三韓征伐〉に遡る。多くの朝鮮人と同様、当時の彼も民族的劣等感を抱いて苦悩したが、やがてこの劣等感が客観的事実ではなく、植民地生活の中で〈三韓征伐〉的発想を内面化した結果と認識するようになった。そこで彼は日本の敗戦＝解放後、まず文学活動を通じて自分の内なる〈関西〉と闘争した。そして七〇年頃から徐々に活動の舞台を古代史に移し、そこでも〈三韓征伐〉などで表現された日本と朝鮮、日本人と朝鮮人との関係を、いかにして人間的なものにするかを探究した。彼の最後の小説「行基の時代」（七八／八一）は、その可能性を追究した果てに書かれたものにも他ならない。

このように関西は、金達寿にとつて知的活動の原点であると同時に、文学

活動の終着点となった場所でもある。むろん両者の間で〈関西〉が意味するものは異なる。原点としての〈関西〉は〈三韓征伐〉的発想の中で表象される権力の中心であり、終着点としての〈関西〉はその中で消されたもう一つの姿である。では彼はいかにしてもう一つの〈関西〉を見出していったのか。本発表ではこの過程に焦点をあてて述べたい。

織田作之助と川島雄三

酒井 隆史

作家織田作之助と映画監督川島雄三についてお話をさせていたいただきたいとおもいます。この二人は、関西と東北という出身地の大きな違いにもかかわらず、みじかいあいだとはいえ、深いまじわりを交わし、たがいの創作、とりわけ川島雄三の映像作品に消しがた

い刻印をもたらしました。大谷晃一さんは、この二人についてみことな評を残しています。「川島は大正七年に、青森県の下北半島にある田名部たなぶ町の商家に生まれた。現、むつ市。

先祖は近江商人という。幼時に小児麻痺をわずらい、足が不自由だった。深刻なコンプレックスを内に秘めながら、表面はむしる陽気で軽佻だったが、寂しがりやの照れ屋である。人のことを

気にして調子を合わせた。昔気質の人情家で、古風な立身出世への憧れがあった。自虐的な汚らしさの中に、人の悲しみを表現しようとした。驚くべきことである。それは、作之助そっくりだった。たちまち、心の通じ合う友人になる」。このような人間の共鳴をきっかけにして、織田作之助の死後、川島雄三は、みずから織田作之助もたらした刻印とはなんだったのかを測定するかのように、いくつかのこの作家に由来する大阪を舞台にした作品

を撮影しつづけます。それを追っつきながら、ここでは、川島雄三によって折りひらかれた織田作之助の大阪について考えてみたいとおもいます。

〔講演〕

『京都』について

黒川 創

〔プロフィール〕

作家・評論家。一九六一年生まれ。京都市出身。同志社大学文学部卒業。「思想の科学」を舞台に評論活動を展開するとともに、一九九一年「若冲の眼」で小説家としてデビュー。以後『もどろき』（二〇〇一）、『イカロスの森』（二〇〇二）、『明るい夜』（二〇〇五）、『かもめの日』（二〇〇八）読売文学賞受賞、『いつか、この世界で起こっていったこと』（二〇一一）、『暗殺者たち』（二〇一三）などの小説を次々に発表。芥川賞、三島賞等の候補にも数次にわた

り推挙される。

小説の他、『〈外地〉の日本語文学選』全三巻（一九九六）、『鷗外と漱石のあいだで―日本語の文学が生まれる場所』（二〇一五）など外地文学に関する精力的な評論・創作活動を展開し、東アジア全域を視野に入れた日本語文学史の再検討を試みている。また『きれいな風貌 西村伊作伝』（二〇一一）や、大逆事件を扱った『国境（完全版）』（二〇一三）伊藤整文学賞受賞など、関西の文化風土に対する著作も多数発表している。

今回は京都の被差別部落を舞台とした小説『京都』（二〇一四）毎日出版文化賞受賞を中心に、「《異》なる関西」の相貌についてご講演いただく予定である。

◆『京都』（二〇一四年一月三十一日新潮社 一四四四円＋税）

ISBN: 978-4-10-44407-6

支部大会報告 二〇一五年度 秋季大会

連続企画「《異》なる関西—1920・30年代を中心として—」

第一回 シンポジウム

二月七日（土） 於・大阪大学

大会発表を終えて

「スバル」の歌人・和貝夕潮のこと

—発表で触れられなかったこと

辻本 雄一

関西支部大会での発表が、緻密さを欠いた、大雑把なものになったことに、忸怩たる思いを引き摺ったままであるが、ただ、今回の発表の端緒が、拙著『熊野・新宮の「大逆事件」前後』（二〇一四年二月 論創社刊）に係わっており、拙著が文学的な面から評価していただけたことは、有難く、嬉しいことだった。

発表の観点は、「西村サロン」の位置づけ——「大逆事件後」のモダニズムとの出会いと、新宮から脱出して大きな成果を成し得たこと（佐藤春夫や西村伊作、沖野岩三郎など）で、もつと整理すべきであった。さらに、その後

後に新宮に留まった者、あるいは帰還せざるをえなかった者にとつて、新宮での「場」はどうなったのか、それらも調査はまだ不十分である。帰還を余儀なくさせられた和貝夕潮の場合も、「大逆事件後」の問題としても検討に値する。

一九〇九（明治四二）年「明星」の後継誌として発刊された「スバル」に

は、新宮の関係者、これから文学を担おうとする若者が多く作品を発表した。佐藤春夫、奥栄一、下村悦夫、中野緑葉らで、和貝夕潮はその先輩格、むしろ指導者で、「明星」以来、確たる存在感を発揮していた。与謝野寛を頼って上京した和貝は、夜学に通いながら、平出修の法律事務所勤め、歌会などでも注目された。「和貝彦太」の名が「スバル」の目次欄に登場するのは、第二巻五号（一九一〇年五月）から。平出修は、新宮の「大逆事件」の犠牲者高木顕明と崎久保誓一の弁護を担当。和貝の「うすぐらき大審院のさぎはしに海思ふこそ静かなりけれ」の和歌などは、事務所員としてしばしば出入りした体験であろう。和貝は犠牲者と家族との面会の仲立ちなどもしている。大審院は訴訟記録一七冊と証拠写真などを贈写して弁護人に貸し与

えた。コピー機などない時代、和貝らは夜昼なしにその筆写に務めた。それらの資料を石川啄木が借り出して、「大逆事件」裁判の正確な情報を把握、「時代閉塞の現状」などを書きあげた事はよく知られている。

「スバル」時代の和貝の活動は、石川啄木との繋がりなどでも、もう少し関心を持たれて良い。私が気になってゐるのは、「大逆事件」死刑執行の翌朝、和貝は啄木と共に遺体引き取りの現場に向いたとする回想を残している事である（「新日本歌人」一九六一年連載）。この日の啄木日記は残されているが、そこでは一切触れられていない。和貝の後年の回想と言うハンデは有るのだが、啄木が咳き込むリアルな描写などもあって、いちがいに和貝の記憶違いとは片づけられない気がする。啄木サイドからは、これまでも誰

も注意されていないように思う。啄木伝記の知られざる一面に光を当てることとなるかも知れないし、当時の啄木にとつては充分に予想できる行動でもある。和貝にとつては、同郷の大石誠之助はじめ、とても他人事ではなかったのは言うまでもない。

一九一七（大正六）年以降、和貝の新宮への「帰還後」については、触れる余裕がなくなつた。

昭和初期・神戸の

文学青年、及川英雄

大東 重和

神戸は幼いころから憧れの街だった。六甲山の北、三田さんだという小さな盆地の、奥まった谷間で育つた私にとつて、街へ出るといえば三宮、都会とい

えば港町神戸を思い浮かべた。たまに母に連れられてセンター街へ出ると、興奮を抑えられなかった。

東京の大学で学んでいたときは、土地と文学の結びつきを意識することはさほどなかった。中国四川省成都で一年間、台湾台南で二年間と海外生活を経験し、また短期留学や旅行・調査でアジアの都市を訪れる経験を重ねる中で、文学が土地に深く根ざしていることを発見していった。そもそもフォークナーにしてもガルシア・マルケス、中上健次にしても、好きな作家はみな土地との対話から自らの文学を作り出していた。やがて私自身、二年の滞りで深い縁を結んだ台湾の古都・台南の文学を描いてみたいとの希望を持つようになり、『台南文学―日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』（関西学院大学出版会、二〇一五年）にまとめ

る仕事を続けた。二〇〇六年、故郷に戻ってから、いずれ関西、できれば神戸の文学をあつかってみたいとの気持ちも抱いてきた。

今回の発表はその最初の試みである。機会を与えてくださった日本近代文学会関西支部の皆さまに、深く感謝申し上げたい。調査が行き届かない中途半端な報告だったが、同じく発表者の増田周子さん、辻本雄一さんからは、神戸と比較する対象としての大阪、新宮の文学について教えられた。コメント役を務めてくださった山口直孝さんは、わざわざ事前に日本近代文学館に足を運び、及川英雄の小説を読んでから来てくださった。司会の高木彬さん、山田哲久さんには懇切な運営をいただいた。

発表を終えて一ヶ月も経たないころ、驚いたことに、及川英雄のご家族

からお手紙を頂戴した。市井の無名の作家だった及川に、どのようにして関心を持ったのか、どのような発表だったのか知りたいとのこと、発表当日に配布した草稿を送らせていただいた。一週間後、及川の墓前に私のつたない原稿の供えられた写真が届いた。文学の研究を志してある時期から、文学研究とは書かれたものを通して人と言葉を交わすことで、ことにその人がすでにこの世におらず、知られること少ない場合、鎮魂の一つの形ともなる、と思ってきた。今後も少しずつでも、神戸という土地と対話しながら創作した人たちの声に、耳を傾けていきたいと思う。

大会印象記

森下 達

二〇一五年度秋季大会では、新しい連続企画の第一回として、シンポジウム「《異》なる関西―1920・30年代を中心として―」が開かれ、三氏が発表を行った。

増田周子氏が焦点をあてるのは、時事新報社が大阪に進出して創刊した新聞『大阪時事新報』である。大阪市が市街地開発を積極的に進め、人口や面積、商工業の点で日本一となったいわゆる「大大阪」時代、同誌の文芸欄にはどのような記述が見られたのか。この点を確認することで、大阪の文化や文学を取り巻く状況を露わにすることが、増田氏の発表の目指すところであった。芥川の自死の影響を受けた青年

の自殺を報じたり、児童文学全集の出版をめぐる北原白秋と菊池寛の論争の舞台となったり、といった形で全国的なニュースとも関わっていた『大阪時事新報』だったが、地元ゆかりの能楽や歌舞伎、声曲、さらには大阪で開催される婦人運動に関する記事等をふんだんに載せるなど、地域に密着した紙面づくりも行われていた。ことに、懐古的なものではあるがカフェー文化を強調する記事はたいへんな充実を見せており、東京と較べて大阪のそれを称揚する記事もあるなど、「大大阪」のモダンなありようを伺わせる。芸能や文化についての記事が充実している反面、狭義の文学に関する記事がそこまで前面化していないのも、この新聞の特徴だった。

続く大東和重氏は、昭和初期の神戸において、公務員として勤めながら作

品を書き継いでいった作家・及川英雄の足跡をたどりながら、同時期の神戸文壇の状況を描き出していく。一九二〇～三〇年代の神戸は、中等教育機関や新聞メディアが充実していたほか、数多くの喫茶店やカフェーがあり、文学青年・芸術青年が活動を行っていくためのインフラ基盤が整っていた。同人誌活動も活発化しており、このような状況下で活躍していた神戸の新進作家のひとりが及川だった。二〇年代、十代で中央文壇への足掛かりを得た及川は、三〇年前後におけるプロレタリア文学への接近や、戦争を挟んでの青春小説の執筆と新聞連載、少年少女誌への作品発表など多彩な活動を行いながら、周囲の文学愛好者たちの世話をしていく。だが、こうした多彩さゆえに、及川はついに純文学における代表作を持ち得ないまま、その生涯を終え

ることになる。とはいえ、彼がものした多様な回想は、海港都市としての進取の気風の中、神戸という街でいかなる文学運動が勃興していたかをよく伝えており、神戸の文化に踏みこんでいく際の格好の入り口となっている。

大阪・神戸といった大都市に焦点をあてた増田・大東両氏と異なり、和歌山県の新宮という場所の特異性を徹底して考察してみせたのが辻本雄一氏である。海上交通を通じて発展した新宮は、モダニズムの時代が到来する以前から、開明的で反骨精神を湛えた場所としてあった。一九一〇年代初頭における社会主義の伝播と、大逆事件を経たその終焉に、こうした特徴がよく現れている。辻本氏は、これを先取りされたモダニズムとして捉えた上で、大正期の「西村サロン」をその反復として重要視する。与謝野晶子の来訪や

「新しき村」運動の波及などを通じて、この時期の新宮は東京とも深い関わりを持っていた。ここでの活動が佐藤春夫にも影響を与えたのではないかという前提のもと、辻本氏が提示するのは、大塩事件を扱った佐藤の「砧」を大逆事件が念頭に置かれた作品として読み直す視点である。

これらの興味深い三つの発表に対して、全体討議で問題になったのは、地域の固有性をどこに、どのようにして見出すのか、という点だった。シンポジウムの共通の土台としてあるのは、一九二〇～三〇年代にアメリカの物質文化を参照する形で日本に導入されたモダニズムである。もっとも、ひと口にモダニズムといったところで、受け入れ側の条件に従って、現実には日本の風土の上で実現を見たそれには質的な差異が生じていかざるを得ない。この

大会印象記

萬田 慶太

ズレを考えていくにあたり、それを大文字の日本に直接結びつけることも、作家個人の問題に還元しきってしまうこともせず、ローカリティーの問題として捉える視点を重視して向き合っていくところはこの連続企画の重要性があるだろうと、ディスカッサントの山口直孝氏はあらためて企画の意義を強調していた。そこでは、関西という単位をどう考えるかということも重要な問題となるだろう。三氏の発表を通じて、大阪と神戸、新宮のあいだで、モダニズムの受容の時期にはすでにズレがあることも見えてきたからである。文学を通じて、作家や作品を超えたひとつの時代精神のありようを見ていくことの難しさとおもしろさを痛感したシンポジウムだった。

関西支部秋季大会は、十一月七日、大阪大学において、連続企画の第一回、シンポジウム「《異》なる関西—1920・30年代を中心として—」として開催された。三本の研究発表はそれぞれ、大阪、神戸、熊野新宮の都市を論点として発表された。

まず、増田周子氏の「一九二〇年代—三〇年代の大阪文化・文学研究」では、『時事新報』の大阪版『大阪時事新報』の文芸欄というメディア媒体を軸にしたものだった。当時、人口と産業規模では東京を凌ぎ、大阪は大大阪と呼ばれ、モダン都市として多くの文化を産みだしていた。『大阪時事新報』の文芸関連記事では、芥川龍之介の死に

関するもの、北原白秋と菊池寛の児童文学全集の論争など、東京と大阪の文壇の関連が見られた。また、『大阪時事新報』では、広津和郎や渡辺霞亭、貴司山治などの関西作家による独自の小説連載が行われていた。また大阪のカフェー文化についても、発行される文芸雑誌の状況を『大阪時事新報』は独自に伝えている。また、プロレタリア文化運動の全国的波及のきっかけとなった作家同盟関西支部の動向を伝えている。関西支部は岡山や高知、三重のサークル運動との交流が指摘されてきたが、これまでその動向はあまり明らかでなかった。これらは資料としての貴重性は勿論、既存の文学史で語られてきた関西文芸、関西モダニズムを裏付け、再記述を可能とするメディアと言えよう。大宅壮一や貴司山治、谷崎潤一郎らの大阪文学に新たな読みを提

供する発表であった。

次に、大東和重氏「昭和期・神戸の文学青年、及川英雄」は稲垣足穂なども輩出した神戸文壇の群像と及川英雄という作家を扱った、全く新しい神戸文学の研究と言える。神戸の中央文壇とは別に存在した「文学」は、モダニズムや新感覚派の影響を受けつつ、関西学院の学生を中心に形成された。また、神戸は中等高等教育機関やカフェー、バーが充実しており、文学が生まれる素地を備えていた。及川英雄は『文芸市場』や『文覚』、『サンデー毎日』などの東京、大阪の雑誌に小説を掲載していた。稲垣足穂は神戸出身で東京で活躍する文学者として一目置かれる存在だった。対照的に、及川は中央で既にデビューしているながらも、役所に勤めながら、神戸で小説執筆を選択した。及川は同人誌『玄魚』、『芸術共和

国』、『新早稲田文学』などの同人になり、多くの作品を生み出した。及川の小説傾向はプロレタリア文学に近かったが、左翼の時代の終焉と役所勤めを契機として大衆小説への傾向が強まるようになる。会場からは稲垣足穂は苦勞しながらも東京へ進出したのに対し、なぜ及川は神戸に留まることを選択したのか、といった質問も出た。発表者の大東氏は及川には文学的野心が欠けていたと指摘した。そこには地方帰着という一つの転向も考えられる。また、古書や多くの資料収集を基に研究が緻密に構成されており、文学研究の領域の拡大と地方性に対する新たな尺度に気付かされた。

最後に辻本雄一氏「熊野新宮―大逆事件―」春夫から健次へ」は、中上健次がたびたび素材とした和歌山県熊野新宮という場所を基軸に、大逆事件

時代のサロン、佐藤春夫の関わりなどをまとめた研究発表であった。熊野新宮という土地は中上文学以来注目されてきたが、海路、木材事業などで栄えたものの、陸路の困難さから経済圏としては関西から孤立し、むしろ東京との交流が盛んな街であった。また、大逆事件被告の一人である大石誠之助も輩出した。逮捕前、大石は非戦・置娼問題と被差別部落問題へ取り組んでおり、大石の逮捕は新宮を震撼させた。

そして、同じく新宮出身である佐藤春夫に衝撃を与え、「愚者の死」という詩が書かれた。詩には佐藤春夫自身の大石への同情と接続が試みられると共に、大石に対する距離感が表明され、リベラルであった佐藤春夫が弁明を表示していく機能を持った。辻本氏は佐藤春夫は「砧」で大塩平八郎の乱を描くが、それは大逆事件の記憶も影響しており、

これらを探っていくことで、佐藤春夫と中上健次という二つの新宮出身の作家をつなぐ糸が見つかるのではと述べておられた。地方における文学活動がより深く掘り下げられており、熊野を中心とした文学の継承と調査に敬意を持った。また大逆事件当時のジャーナリズムと地方が衝突し、多くの作品が生み出されていく様相は、帝国時代の地方の位置づけを改めて考えさせられた。

デイスカッションでは大阪、神戸という大都会のモダニズムと新宮のモダニズムを比較する意見も上がった。三つの発表はどれも文学と地方性を複眼的にとらえ、文学史を書き直していくものであった。グローバリズムの浸透の中で、地方や文学という概念を考える時再検討されるべき問題であり、全国的波及と地方性の相克が見出される

ものだったと言える。

木村 小夜 著

『太宰治の虚構』

長原 しのぶ

多様な切り口と方法論で紐解かれ日々深化している太宰研究にあつて「虚構」と「現実」は今なお重要な問題であり続けている。本書はこの問題に正面から取り組んだ二冊である。

著者は新たに「言葉」そのものが持つ「虚構」化の力と太宰自身の読み手を巻き込む「虚構」の仕掛けに注目し、太宰作品の特徴を「虚構と現実の間でせめぎ合い聴き手・読み手を前提とした語りがいいくつかの特徴的な手法で戦略的に駆使され、単一の読みへの収斂を阻み、虚実を反転させていく」と捉える。「虚構」と「現実」の関係を「越境」「反転」という言葉で語る著者の分析には両者の間に存在する問題への一つの解答を得た気がする。

前著『太宰治翻案作品論』(二〇〇一

年二月 和泉書院)ですでに「ずらしや差異によって規範や型を逆手にとる」翻案という方法から見た「虚構」と「現実」の「侵入・挑発」という化学反応が論じられた。本書では翻案作品に加え、書く方法そのものが主体となる初期作品群や告白小説、回想形式、書簡体小説など太宰の特徴的作品をほぼ発表順に網羅した形で考察を深めている。著者は翻案小説と実験的小説の間に「ひとつの筋で把握されてしまうことから遁走し続ける小説の言葉としての積極的意義」という共通点を見出した。太宰の手法が「語り手・書き手と聴き手・読み手の関係を作中に内蔵し、可視化させる手法(告白体・書簡体・手記)は現実と虚構の関係を相対化していく言葉の特質を自覚的に取り

込み際立たせていく」との指摘は各章で考察された作品の全てに窺うことが可能だ。

例えば、「II 告白と手紙」で取り上げている「誰も知らぬ」ではその語りは「語り手と読者双方によって現実・虚構の間の越境を可能」にし「最終的には現在の読者」も巻き込むことが述べられる。そして、「III 翻案の諸相」における「駆込み訴へ」では語れば語るほど「言葉にならぬ言葉」へと落ちていくユダの姿からみる「言葉」そのもののあり方が示されている。いずれも緻密な分析がなされ太宰の意図と仕掛けを探るうえで興味深い。最後に置かれた「人間失格」では「補 研究の現在」が加筆され、現在も進歩し続ける「人間失格」論の現状を踏まえて「今後どのような論展開が可能か」と結ばれる。著者による虚実の問題を含めた更なる「人間失格」論を期待したくなる。(二〇一五年二月二十五日 和泉書院 二九六頁 四八〇〇円+税)

石原 深予 著

『尾崎翠の詩と病理』

北川 扶生子

本書は、これまで時代から孤立した個性と把握されがちだった尾崎翠を、同時代の文化や文学作品との影響関係のなかに置き直し、「詩」と「病理」というふたつの観点から「脱神話化」する、という意図によって構成されており、論文編と資料編から成る。

本書の意図は多くの成果を生んでいるが、もっとも大きなものは、神秘思想や精神療法から文学作品に至る分野における「第七官（感）」の用例を博捜し、尾崎の造語とされてきた「第七官（感）」が、一般的な語彙だったことを明らかにした点にあるだろう。第一章「第七官」をめぐる一明治期から昭和初期における「第七官」の語誌と尾崎翠の宗教的・思想的背景―では、

神秘思想、民間療法、骨相学等―の幅広い調査を行い、尾崎のみならず有島武郎、芥川龍之介、内村鑑三、夏目漱石ら多くの文学者・思想家たちを取り巻く時代の断面を浮かび上げさせている。この点で、本書は作家論を枠組みとしながらも、尾崎を覗き窓にした神秘思想受容史の側面も持ち、尾崎文学のみならず日本の近代文学と神秘思想の関連を知る上でも興味深い。

続く第二章「第七官界彷徨論―喪失感」と「かなしみ」、「回想」のありかた―では、以上の語誌を踏まえて「第七官界彷徨」が読み直され、作中のモノや語彙が関東大震災以前の時期を指示しており、「震災以前の大正期への懐旧心」が本作にあらわれているこ

とが示される。第三章「歩行」論―おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ―では、古典和歌からの影響に目配りしつつ、本作の円環構造や旅立ちの意味が再考され、第四章「こほろぎ嬢」論―神経病、反逆、頭を打たれること―では、「心の深い層に降りても肯定的な女性像を見つけれない」「孤独感」が読み取られる。第五章「地下室アントンの一夜」論―ロシア文学受容、統合失調症の精神病理を補助線として―では、チエーホフの影響を解明しつつ、本作に描かれる「回復の可能性」が確認される。

資料編では、作品や書簡など数多くの新資料が掲載され、林芙美子への影響など新見も多い。ねばり強い資料調査と心理的洞察で尾崎研究に功績ある著者のこの十年の集大成。尾崎翠を時代に解き放つための、必見の書である。
 (二〇一五年三月一〇日 ビイニング・ネット・プレス 三四四頁 三五〇〇円十税)

書評

大東 和重 著

『台南文学―日本統治期台湾・台南の日本人作家群像―』

竹松 良明

本書の成立契機は著者がかつて二年間、台南にある大学に教員として赴任したことよって、台北を東京とすれば京都にも当たるべき年旧りた古都の情趣に満ちた台南というこの街の得も言われぬ魅力こそは、「台南文学」というこれまであまり聞いたことのなかったこの言葉が近代日本文学のエリアにおいて確かに登録されるための、最も有力な担保になっているはずである。台南の魅力あつてこそその「台南文学」であることは、本書の序章「鳳凰木の花咲く街で」を一読すればたちどころに了解されるのであり、その昔には台南の多くの並木道、中でも大正町通り（現・中山路）の見事な並木のトンネルを形成した鳳凰木の花の鮮や

かな朱色は、現在ほとんど眼にすることができない。歴史の中の幻のようなこの美しい並木道への愛惜の思いは、往時の台南に在住した日本人の回想の一言「風と共に去った日本人と命運を共にした観のある名物の木」という表現に込められたような、日本統治期の台湾時代の全てをものはやなり構わずひたすらに懐旧的情緒一色で塗りこめてしまうほどの熾烈さを感じさせるものである。

本書は「台南文学」の最初の記念碑的作品である「女誠扇綺譚」を書いた佐藤春夫を別にすれば、いずれも「台湾二世」またはそれに近い台湾との密接な関係を持つ三人の文学者およびイストラム史学者前島信次、民俗学者国分

直一の台南に向ける各々の思いを考察している。「女誠扇綺譚」については、ローデンバックの「死都」からの影響関係の論考もさることながら、自殺した下婢が「査媒嬬（さぼうかん）」（＝金で買われた女奴隷）である事実から、「伝統的台湾社会と近代における日本の統治とが交差する地点にまで」深入りできたという鋭い視点が見られる。「陳夫人」で成功した庄司総一については、石坂洋次郎「麦死なず」からの影響関係も創見に富むが、むしろ庄司の戦後の不遇と「文学的横死」の様相に読み応えがある。西川満「赤嵌記」への谷崎「吉野葛」などからの影響、また西川の「耽溺的ロマンチズム」への警鐘も鋭く、新垣宏一の「城門」「砂塵」などをもつばら皇民化運動に即した支配・被支配関係でのみ捉えて読取ることへの危険性の指摘も犀利な感覚に満ちている。（二〇一五年三月三十一日 関西学院大学出版会 五〇七頁 三四〇〇円＋税）

紹介

大橋毅彦・関根真保・藤田拓之編

『上海租界の劇場文化―混淆・雑居する多言語空間』

戸塚 麻子

ライシヤムシアター（中国名・蘭心大戲院）は、上海租界においてオーケストラ、バレエ、オペラ、演劇、中国話劇等を上演していた劇場である。本書は、大橋毅彦が述べるように、この劇場を起点として「上海の文化界を望見しようとする試み」（五頁）として初の論集といえる。

本書は三つのパート「Ⅰ 多言語都市の中のライシヤム」「Ⅱ 〈中国人〉にとつての蘭心」「Ⅲ 乱反射する上海租界劇場芸術」から成るが、論考の多くは第二次上海事変からアジア太平洋戦争終結までを扱っている。従来の「日本の大陸侵攻によってこの時期の上海の文化は衰弱していくという考え」では捉えきれない、「劇場文化のある種の可能性」（以上五頁）を随所に見ることができるだろう。

本書には扉や各論の中に当時のメディア（中・英・仏・露・日など）に掲載された広告や上演写真等があり、資料的な価値も高い。また、コラムや年表もあり、戦時上海の劇場文化をこれから知ろうとする人にも便利な一冊となっている。

（二〇一五年四月三〇日 勉誠出版 二二八頁 二四〇〇円
十税）

会議の記録（二〇一五年度）

四月二十五日（土）

【運営委員会】二〇一五年度運営体制について（委員名簿の確認、役割分担確認）、『作家／作者とは何か―テクスト・教室・サブカルチャー』出版について、二〇一五年度春季大会について（プログラム・当日の運営・役割分担の確認、印象記執筆者候補の選定）、二〇一五年度秋季大会について（連続企画「《異》なる関西―1920・30年代を中心として」第一回企画内容の確認、登壇者候補の人選）、連続企画第二回以後の方向性について、会計報告・予算について、「会報」第二号について（編集スケジュールの確認・書評対象図書の採否・執筆候補者の選定）、年間スケジュールの確認、「会報」第二号号送作業。「奈良大学」

六月六日（土）

【運営委員会】二〇一五年度春季大会および総会について（スケジュール・役割分担・総会の議題の確認、議長団の人選、会計報告・予算案の確認）、二〇一五年度秋季大会について（プログラム案の作成、特集企画について、他団体との連携について、「会報」第二号について（書評対象図書の採否・執筆候補者の選定、締切等の確認、紙面構成）、連続企画について（企画内容の検討、登壇者への原稿依頼、今後のスケジュール確認）。

【編集委員会】『作家／作者とは何か』出版について（表紙案および内容の検討、版權の処理について）。

【総会】新運営委員紹介、二〇一四年度事業報告、二〇一四年度会計報告、二〇一四年度会計監査報告、二〇一五年度事業計画、二〇一五年度予算案。
〔武庫川女子大学〕

七月二十五日（土）

【運営委員会】二〇一五年度秋季大会について（当日の運営・役割・連続企画について、二〇一六年度春季大会について（日程および会場校について）、連続企画について（第二回の企画内容、自由発表の扱い、ワーキンググループの結成）、連続企画「《異》なる関西」出版事業について（原稿管理担当の新設、編集委員会について、原稿依頼について、出版時期について）、「会報」第二号について（編集スケジュールの確認、書評対象図書の採否・執筆候補者の選定、内容確認と校正）。「奈良大学」

八月二日（土）～三日（日）

【連続企画委員会】登壇者との打ち合わせ、報告内容に関する実地踏査。
〔新宮市立佐藤春夫記念館等〕

八月下旬～九月月上旬

【運営委員会（メール会議）】二〇一五年度秋季大会について（会場校との連絡、タイムスケジュールについて）、連続企画第一回について（シンポジウムについて、司会の選定、登壇者への原稿依頼について）、連続企画第二回について（趣旨文の検討、プログラム構成の検討、自由発表について、WGの結成について）、連続企画「《異》なる関西」出版準備について（原稿管理担当について、原稿依頼内容について）、「会報」第二二号について（編集状況の確認、書評対象図書の採否・執筆候補者の選定、内容構成について）。「※各委員の日程の都合がつかず、この回の運営委員会については試験的にメール会議の形で実施した」

九月二六日（土）

【運営委員会】運営委員会の開催方法について（メール運営委員会の議題

の再確認、今後の運営委員会の持ち方について）、HPによる大会日程の告知について、二〇一五年度秋季大会について（スケジュール・役割分担の確認、シンポジウムの進行について、印象記執筆者の人選）、連続企画出版（『作家／作者とは何か』）について（画像使用料の支出について、版權に関する対応について）、「《異》なる関西」出版計画について（スケジュールの確認、原稿依頼に関して、原稿の管理について、シンポジウムの原稿化について）、二〇一六年度春季大会について（会場の確認、連続企画について、自由発表募集方法の検討）、「会報」二三号について（編集状況の確認、書評対象図書の採否、執筆担当者の人選）、「会報」第二二号発送作業。「奈良大学」

一一月七日（土）

【運営委員会】出版事業（『作家／作者とは何か』）の出版について、二〇一

五年度秋季大会について（スケジュール・役割分担・印象記執筆者の確認）、二〇一六年度春季大会について（自由発表の公募方法・締切等の確認、特集について）、連続企画について（趣旨文の再検討、登壇者の人選、スケジュールの確認）、連続企画「《異》なる関西」出版に関して（執筆要項の検討、登壇者原稿の扱いについて）、「会報」について（二三号編集状況の確認、二四号書評対象図書の採否・執筆担当者の人選）。「大阪大学」

一一月上旬

【メール会議】次期運営委員長および新年度体制に関する意見聴取。

一一月一九日（土）

【運営委員会】二〇一六年度春季大会について（プログラムの確認、自由発表公募の告知方法について）、連続企画（第二回）について（タイトル・趣

旨文の検討、プログラム案の検討、司会・登壇候補者について、二〇一六年度秋季大会について（会場校候補について、プログラムについて）、「出版契約書」の内容検討について、「会報」について（第二三号編集状況の確認、第二四号書評対象図書の採否・執筆担当者の人選）、新年度体制について（次期運営委員長決定の手続きについて、候補者の推薦について、運営委員の定数について、新運営委員の人選について）。「奈良大学」

一二月下旬～一月下旬

【メール会議】次期運営委員長選出について（投票および結果の告示、交渉の経緯について）。

二月二〇日（土）

【運営委員会】次期運営委員長選出に関する経過報告、二〇一六年度春季大会について（プログラム・タイムテ

ーブルの検討、登壇者の確認）、二〇一六年度秋季大会について（会場校について、特集企画（第三回）について、スケジュール確認、「会報」について（第二三号編集作業の確認および校正、第二四号書評対象図書の採否・執筆担当者の人選）、新年度運営体制について（運営委員の退任と補充について、次期運営委員長の決定について、運営体制の改革について、運営委員会の引継ぎについて）。「奈良大学」

三月二七日（日）

【運営委員会】次期運営委員長について（委員長の決定について、委員長に関する会則の整備について）、二〇一六年度運営体制について（組織体制の見直しについて、各役割の再検討について）、二〇一六年度春季大会について（プログラム・タイムテーブルの確認、企画内容の検討）、二〇一六年度秋季大会について（公募企画案について、自

由発表について）、会計報告および予算案について、「会報」の編集について（第二三号の内容確認・校正作業、第二四号書評対象図書の採否・執筆担当者の人選）。「奈良大学」

四月～三月

【企画出版編集会議（メール会議）】『作家／作者とは何か』出版について（内容の検討確認、校正、等）。

【連続企画委員およびWG会議（メール会議）】連続企画「《異》なる関西」1920・30年代を中心として」について（企画案・趣旨文の検討、プログラム内容の検討、今後の方向性について、等）。

日本近代文学会関西支部編

『作家／作者とは何か』

——テキスト・教室・サブカルチャー——

〈作家／作者〉を取り巻く状況が渾沌とする現在において、その存在が投げかける問いは、より複雑な様相を呈している。今こそ、文学場における多元的な〈作家／作者×のアプローチ〉を目指すべきではないだろうか——。「まえがき」より）
研究の現在を見すえたシンポジウムの模様と一〇本の論考を収録。様々に拡張するイメージを分析、教室の中の文学やサブカルチャーにも目を向け、新たな地平をひらく。



(二〇一五年一月一日 和泉書院

一五六頁 三六〇〇円十税)

二〇一五年度役員

支部長

浅子逸男

運営委員長

木田隆文

運営委員

天野勝重

岡村知子

斎藤理生

坂堅太

重松恵美

須田千里

関肇

高木彬

高橋幸平

瀧本和成

戸塚麻子

中谷いずみ

西山康一

信時哲郎

福岡弘彬

ホルカ・イリナ

前田貞昭

山崎正純

山田哲久

山本昭宏

山本欣司

和田崇

二〇一六年度関西支部秋季大会開催、及び研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一六年度関西支部秋季大会を、連続企画「異い」なる関西―1920・30年代を中心として―」の第三回として、左記の要領にて開催いたします。

日時・会場 二〇一六年一〇月二十九日（土）甲南女子大学

※詳細は決定次第、関西支部HPでお知らせいたします。

なお、当日は自由論題での発表枠も設けております。左記要領にて募集いたしますので、支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

応募締切 二〇一六年七月一五日（金）必着

応募要項 発表題目および六〇〇字程度の要旨を封書でお送りください。必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

発表時間は三〇分程度です。

採否については、運営委員会で決定し次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

送付先 日本近代文学会関西支部事務局

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-6 武庫川女子大学文学部 山本欣司研究室内

○報告者・内容等の詳細は後日HPにてお知らせします。

事務局便り

○ 献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

● 対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

● 送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○ 維持会費納入のお願い

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

○ 関西支部二〇一六年度役員（○：新規役員）

浅子逸男（支部長） 天野知幸 ○泉谷瞬 岡村知子 ○加藤邦彦 ○木谷真紀子 斎藤理生 坂堅太 重松恵美
須田千里 関肇 高橋幸平 瀧本和成 ○田口律男 ○田中裕也 戸塚麻子 中谷いずみ 西山康一 福岡弘彬
ホルカ・イリナ ○増田周子 ○三品理絵 山田哲久 山本昭宏 和田崇

○ 日本近代文学会関西支部事務局 〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-16 武庫川女子大学文学部

山本欣司研究室内（※事務局が変更となりましたのでご注意ください）